

信濃善光寺本理院殿廟墓について

鷹 司 誓 玉

昭和四十三年夏、大本願では長野市善光寺本堂の北側に位置する「徳川家廟所」と稱する一廓の修覆を行つた。それは善光寺境内ではあるが従來から大本願の所管であつて、隣接する歷代上人廟と共に現在も本坊の尼僧が毎月の參詣回向を缺かさずつとめて居り、江戸時代以來の徳川家と本坊との因縁の深さをしのばせるものである。

その廟所の中心の本理院殿墓塔は當時最も破損が甚しく、徹底的修理が行われた。その折積みなおされた墓塔は今後再び解體する事はないと思われたので、施工の間僅か數時間にすぎなかつたが内部構造を記録し、收藏品の撮影を行つておいた。同廟所内の墓碑七基のうち、經歷の分明なものは四基にすぎないが、それらに關する考察をも加え、一應の調査報告をさせて頂きたいと思う。

一、廟所の位置と墓碑の配列

徳川家廟墓が善光寺本堂北の現在地にうつし造られたのは比較的近年のことで、且つてその位置には如來の御年越宮があり、徳川家の靈牌は大本願構内の御靈屋に祀られていた。

現在の善光寺山内諸堂舎の配置は、寶永二年回祿以後大巾に變更して、寶永四年再建の本堂を中心に従前よりは

るかに大規模に造られたものである。寶永回祿以前の狀態をしる手がかりとしては天和三年の善光寺境内圖（市內新町・上原第二氏藏）などあるが、それによると大本願、大勸進の兩本坊の位置にかわりはないが、本堂は兩本坊のほゞ中程にあつてその北に御年越宮という小祠が記されている。而して大本願敷地内北側（塀の内部で現在位牌堂のある位置）に御靈屋御供所、西側に墓所、上人御門前地などあり、塀をへだてた北側の仁王門を東西に結ぶ通り（今は櫻枝町と稱す）を「ラカン小路、一に御靈屋小路とよぶ」と記入してある。

廟墓の現状をのべるまえにまずその前身とも言うべき御靈屋、並びに現在の位置にあつた所の御年越宮について若干の考察を加えておきたいと思う。

御靈屋は大本願藏の文書によると徳川家光の發願により、母崇源院即ち二代將軍秀忠の室の菩提のために徳川家から靈牌が納められたので靈廟一字を建立したとあるのが濫觴と思われる。代々の將軍家夫妻は佛教に對する披護あつく、善光寺にも寺領御朱印をはじめ種々の形で關心をよせていられる。

例えば寛永三年七月徳川家より御年宮修覆の普請がなされ、その支配を大本願に申付けられ（秀忠の時）、家光の代には三年目毎に行われる善光寺上人の登營拜謁の風がはじまつた。家光の室本理院については後に詳述するが、崇源院と全じ信州御靈屋に分骨及び靈牌がおさめられた。更に五代綱吉の元祿五年・全十四年、及び八代吉宗の元文五年等には信州善光寺の江戸開帳が行われたが、その都度「お城入り」と稱して如來の尊像を江戸城二ノ丸及び三ノ丸に招待し、將軍家夫妻をはじめ大奥の多數が如來を拜禮し、上人によつて「御印文頂戴の儀」をうけていられる。また慶長六年以來谷中に興えられてあつた上人の江戸宿所が元祿十六年焼失の後、寶永二年青山百人町に替地をたまり永く青山善光寺と稱して上人の江戸兼帶所として榮えるに至つた。

斯様な因縁で徳川家は信州及び青山の兩善光寺に對し、折にふれ金品を寄進し、ことに信州御靈屋の維持には心を配られたようであつて、寛政年間の大本願の日記には御靈屋修覆に關する記述が安永度の前例をそえてのべられている。即ち安永七（一七七九）年五月廿七日には智觀上人が登城し凌明院（十代家治）より「御靈屋分、百兩。御歳宮分、百五十兩」を下された。實際の修覆は翌八年に行われたがその時「本理院御骨壺由諸書」という板書が御靈屋から發見された。文面は次の通りである。

本理院殿照譽圓光徹心大祥禪尼尊儀 家光公御室御玉屋 誓譽代建立 御逝去後重誓代御骨 御位牌御奉納 實永二年五月朔夜火事燒鹿石殘 豫悲歎 綱吉公御室兩（再カ）營願奉置 實永四年八月十五日願主大本願百十三世光蓮社心誓明觀智善上人

これによると江戸谷中にはじめて善光寺の地を賜つた百十一世の誓譽智傳上人（寛文十二年まで住職）が信州にお玉（靈）屋を建立され、百十二世重誓誓傳上人の代に本理院の御分骨（實は遺齒）が納められた。その年次は不明であるが今上人は享保十九年の遷化であるが、それより早く元祿十一（一六九八）年に隱居せられているので、元祿十一年を推定の下限としてよいであろう。所が實永二年の火災で御靈屋も燒失したので實永四（一七〇七）年綱吉公の夫人淨光院の願で再興されたということで、全じく寛政六年日記の七月九日の條によると、

御本丸表吏様方まで御連名にて左之通り御先例書相認差出ス

一、御靈屋 歳宮 右

崇源院様本理院様御建立被成下候

右寺坊類燒之節記錄等燒失致候而 年月難相知候

信濃善光寺本理院殿廟墓について

常憲院様御臺様御建立被成下候而 實永三戊四月御大奥御老女様方迄御願申上候て 同五月十一日登城被仰出候て 爲御修覆金

一、御靈屋分 二百兩

一、歳宮分 三百兩

右書付ヲ以頂戴仕候

とあり、計五百兩を寄進された事が知られる。この前例からして寺社奉行所に提出した「奉伺候覺」十五ヶ條（寛政六年日記・十一月二十八日の條）のなかでも

一、信州善光寺於境内

御靈屋并如來年宮及大破候節は御年寄様方迄并御表吏様方迄御再建御修復等願於大御奥被仰付

とのべ、御靈屋及び御年越宮大破につき修覆の件を繪圖面をそえて願書提出している。その後職人を交えて經費の交渉がいくたびか行われた結果、寛政九（一七九七）年四月廿七日に至りようやく完成している。ちなみにこの時の費用は三百兩を公儀から下され、實費百十八兩であつた。右の繪圖面は残っていないので構造は知るよしもないが寛政八年日記の一月十七日の條には

御靈屋僧一人、道心一人、中間一人

をにおいて朝夕の御供養に専従させていた記録がある。

これ程尊重せられた御靈屋が本坊構内から失われたのは、弘化四年の大震災のためであつたことが大本願藏の次の書狀によつて知られる。

御直意之趣

一、去末年信濃國大災以來 御靈屋并如來歲宮自坊に至迄末其儘ニ而再建の手段無之 其上青山及本堂諸堂共再建中旁以勝手向不如意ニ相成 此分ニ而ハ中々再建之企茂行届兼深人々心痛候 依之手元を始諸向共格別之致省略再建助成相成候様致度存候得とも 是迄とても都而儉約中尙また此上切詰候得は就も難澁ニハ可有之候得共 來多年より卯年迄五ヶ年之間萬端致省略聊ニ而も普請助成ニ相成候様致度存候間 我等と友に難澁致吳候様頼入候 委細之義は老尼共より可申間候

戌十一月

この成年とは嘉永三年、文久二年、明治七年のうちのいづれか記入がないので斷定は出来ないが「末年信濃大災」が弘化四年の大震災をさし、「青山及本堂諸堂共再建中」の語があり、青山善光寺も文久元年の江戸の震災で崩壊している所から、恐らく文久二成年のことと推測される。弘化四年地震はあたかも信州本寺で開帳中の三月二十四日におこり、本堂と山門は残つたが、大本願や仁王門はじめ各所の破壊甚だしく他國からの參詣人をもふくめ數千人の死傷者があつたという程の大慘事となり、あとの復興は容易でなかつた。加えて幕末維新にかけての社會的變動も甚だしく、震災で倒壊した御靈屋は關係者が心をいたためたまゝついに復舊をみず、やがて本堂北側の地に内容のみ移される結果となつたのである。

以上御靈屋について概観したが、その場合文書類の上では「御年越宮」の名稱がつねに一語に記されてある事に注意せねばなるまい。これは御歲宮、歲神堂、御年宮など色々な文字であらわされるが、古くから本堂の北にあり寶永の本堂移轉にともない、その後も現本堂の北に祀られてあつた。如來の越年式の夜、堂童子が天下安泰の祈禱

を修した堂社で、徳川期には毎年正月に「年始御禮」と稱して御年宮の御祈禱札、全御供物、如來の御影札等を將軍家に献上する風があつた。例えば大本願における各種の重要事項を記録した二冊の帳「事務綱要・上巻」には

一、正月十日御老女方御表吏衆江別段文を以信州善光寺歳宮御修復成就仕 舊臘歳越之修法御祈禱相勤候 右御供物當正月十六日献上仕當年ニ 公方様江献上仕度御奉願候（安永九年）

一、正月廿一日歳宮御供物一箱御目録添

右は 公方様江斗献上也

とあり、同書によれば三年目ごとの登城拜謁に際しても「御歳宮御供物一箱 別紙御目録添」えて公方様に献上した事を（天明二年・五年・八年の例）記録してある。

また無記年の書狀ではあるが全じく大本願の資料の中に

御歳宮并御供所共ニ往古より本願一人にて建立仕棟札等も本願一名にて打來則支配之中衆ニ申付右宮室ニ而年々一子相傳之密法修行致させ來候

との記録もあり、上古のことは判らないが少くとも寶永再建以降は御歳宮、御靈屋ともに徳川家被護のもとに大本願が經營して來たことは明らかである。

永い傳統をもつた年越宮が廢されるに至つた原因はまだ詳らかにし得ないが、おそらく明治初年の神佛分離令の餘波で善光寺が神道色を拂拭して佛寺一本化につとめた結果であらう。明治十二年十二月

式内大社健御名方富命 彦神別神社字本城へ再興に付年宮悉皆彦神別神社へ寄附 あとの地を大本願廟所とす

（大本願文書）

⑥ ということである。社殿の大きさは明治初年の圖面によれば四間四方の社殿に三間の拜殿がつき間を六尺の階でむすんであつた。年越宮が元來大本願の所管であつた所からあと地の處理も容易にはこんだようである。本堂北向拜の階段下から北方へあらたに參道がつくられ、それをはさんで並列的に大本願歷代上人廟が右に、徳川家廟所が右に、ともに南面して造られたのである。

その時期は明治十二年日記などによつて徳川家廟所は

御靈地御拂下ゲ本理院殿寶塔外三基御本堂裏年越堂のうちへ移し、古墓の残り（無縁）も全所へうつす（大本願日記 十月一日の條）

とあり、歷代上人廟については「明治十二年十二月大本願構内より本堂裏へ引移し之圖」という圖面がある所から、ほとんど全じ頃に移築された事が知られるのである。

徳川家廟所は東西六三〇糎、南北四九〇糎の長方形で、約九〇糎の高さの盛り土の周圍を石垣で築き、南面中央に四段の石階が設けてある。玉垣をめぐるした墓域の内には、最も大きい本理院殿の寶篋印塔形墓を中心として三基が正面南向きにあり、その兩横に二基づつ各々中心に向き合つて、合計七基の墓塔が建立してある。〔第一圖〕今假りにA-Gの記號を付けて各々の銘文を寫し、經歷等の明らかにし得たものは記入しておこう。（但し、A本理院殿については次章にのべる）

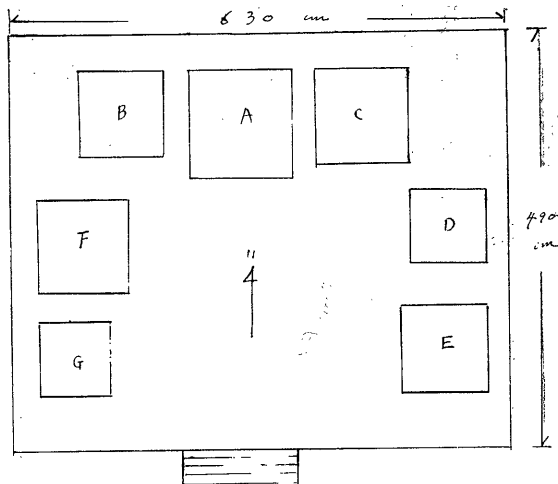
B、良雲院殿天譽喜清大姉

寛永十四丁丑天

正面

三月十二日

信濃善光寺本理院殿廟墓について



第一圖

寶篋印塔。臺石の大きさ 60×60 cm、塔頂までの高さ 210 cm

良雲院殿は家康の側室。「柳營婦女傳」などによると俗名お竹、市川氏或は武田氏の出といい、振姫（淺野長成の室）の母で、歿後は淺草の西福寺に祀られている。

C、紅玉院殿性譽法君清月大姉・寛文十三年……正面

寶篋印塔。臺石の大きさ 76×74 cm、高さ約 168 cm（但し寶珠を欠く）。

甲府宰相綱重の御簾中。柳營婦女傳・玉興記などによれば山科家の生れであるが二條光平公の女として本理院殿が養女に迎えられた。本理院殿の父信房は二條家の生れであるが、鷹司家が十一代冬忠の歿後三十四年も中絶していたので養子に入り再興されたその縁にもよるのであろう。のち綱重に嫁し午松君をもうけたが即日早世、約一ヶ月餘り後（寛文十三年八月二日）逝去。紅玉院殿と諡號され母子共に天徳寺に葬された。

D、麟祥院殿

仁淵了義

大禪定尼

正面
(塔身部)

寛永二十年
九月十四日

施主獻

正面
(基石部)

寶篋印塔。臺石の大きさ 45×45 cm・高さ約 160 cm（但し寶珠を欠く）

三代家光の乳母阿福、春日局として知られている。寶永二十年六十五歳で歿し、湯島の天澤山麟祥寺に葬された。
E、寶隆院殿松譽順榮貞顔大姉……正面

元祿八年

六月二十七日

側面

堀田氏

寶篋印塔・臺石の大きさ 73×73 cm、高さ 200 cm

素性不明であるが堀田氏とある所から春日局につながる縁者かとも思われる。

以上いづれも内部は調査しなかつたが別處にそれ〴〵菩提寺がある所から、本理院殿のものと全じく清墓であろう。また先述の御靈屋の沿革からみて崇源院殿の墓塔も當然あつたはずと思われるが今は存在しない。これ以下の三基は明治十二年の日記にもすでに「無縁」となつていて身元不明の合祀墓塔である。刻銘も破損が甚だしいがよみとれるもののみ念の爲記しておく。

F、

三月八日

堅通三界精指九居

正面(東)

光蓮社心譽上人

寶永二乙酉歲

靈樹院殿月光壽心大姉淑儀

(南)

五月十日

信濃善光寺本理院殿廟墓について

寶永三年

純清院殿江月定光大章女

(西)

九月十三日

巖性院全翁常子居士

(六星紋あり)

智光院殿明譽幻□童女

寛永二年五月六日

(北)

妙□院清譽大姉

五輪石塔・臺石の大きさ76×76 cm、高さ約200 cm

G、元禄十二年八月十八日

自得院殿茂庵常林大居士

一蓮

各靈

正面(東)

本臺院殿明圓古鏡大姉

延寶六年三月五日

俱會(五靈位合祀・名は略す)……(南)

一會(五靈位 同 右)……(西)

一會(四靈位 同 右)……(北)

五輪石塔・臺石の大きさ58×58 cm、高さ183 cm

二、本 理 院 殿

本理殿は俗名孝子。慶長七（一六〇二）年關白鷹司信房の女として生れた。母は侍從陸奥守佐々成攻朝臣の女で岳星院と稱した。「野史」などによると元和九年十二月三代將軍家光の御臺所として西ノ丸に迎えられ、寛永元年本丸に入り、全二年八月二十四歳の時婚儀を上げた。家光より二歳年長で妬心がふかく、舅秀忠の命で中ノ丸に移され、爾後「中の丸様」とよばれた。慶安四年四月二十日家光が薨じてからは落飾して本理院殿と稱し、延寶二（一六七四）年六月八日七十二歳で薨去。遺骸は十九日傳通院に埋葬され二十日千部經の讀誦が行われ銀二百枚が奉納された。後に火葬に附し百ヶ日回向をすましてから高野山大徳院に納骨された。善光寺御靈屋に分骨が納められたのも恐らく全じ頃で、先に記した如く「本理院御骨壺由緒書」の書面に重譽上人の時とある所からして延寶二年薨去の時以降元祿十一（一六九八）年重譽上人住職隱退に至る二十四年間のあいだに行われたものといへよう。なお薨後約九十年を経た寶曆十三（一七六三）年從一位が贈られている。

徳川家と善光寺上人との關係が家光の時代以降漸次密接になつていつたことは前節にみた通りであるが、ことに本理院殿の志は篤かつたようである。未亡人としての二十餘年のみならず家光在世中からすでに中ノ丸に別居であつた淋しい生活環境や、實家の近親者で佛門に歸している人の多かつた關係もあり、佛教信仰も深かつたのであらう。

現在善光寺什寶として御印文及び御印文臺を納めた蒔繪の筥（約40 cm 平方、高さ40 cm）がある。越年行事に堂童子によつて用いられる非常に重要なものであるが、これは寛文元（一六六一）年に本理院殿から奉納されたものである。^⑧

即ち宮の蓋の内側に次の銘がみられる。

鷹司左大臣從一位前薄陸殿藤原

信房公息女本理院圓光徹心大姉

寄進

臺徳院

崇源院

大猷院

法應院

覺正院

寛文元年辛丑七月十五日

この年は大猷院（家光）の薨後十年目に當り、本理院殿は五十九歳、臺徳院（二代秀忠）及びその正室崇源院の舅・姑・亡夫や法應院・覺正院（未詳であるがいずれも高位の近親者であろう）の五靈位追善のため寄進せられた。またこの時共におさめられたものかどうかは不明であるが鷹司家の牡丹の紋章入り三ツ重ね朱盃も大本願に傳つている。右の翌年寛文二年には本理院の代理が善光寺に參詣し、大本願の誓誓智傳上人の御案内で横棚（長野市内）の靜松寺に一泊された記録が「靜松寺文書」の中に残っている。この寺は源頼朝の祈願所と傳え、笈佛を祀つてあり、その戸帳を寄進されたようである。

廟所の墓塔は寶篋印形で刻銘は

本理院殿照譽圓光徹心大師……正面

延寶二甲寅歲

六月初八日
……側面

臺石の大きさ78×78 cm、塔頂までの高さ270 cm。構造は（第二圖参照）礎石から地・水段にかけて内部をくりぬき、底に小石がしきつめてあり壺をおさめた石製筐が地段部の中程で浮く状態になつていて濕氣を防いでいる。

筐は墓塔と今質の花崗岩製角形、丸蓋つきで内部は圓筒にくりぬかれてゐる。壺は手ひねりの感じで厚さ0.8 cm、外側に青黒い釉藥がうすくかゝつて居り、古陶器研究家の佐藤雅彦氏の寫眞鑑定によれば「江戸期の丹波焼」であらうとの事で、大きさは圖の通りである。

壺の内には銅板と小さい曲げ物の器が入つてゐた。銅板は21×3 cmで片面に

征夷大將軍源家光公 室 御骨也

鷹司關白從一位左大臣信房公御息女

とあり、片面には

延寶二甲寅年

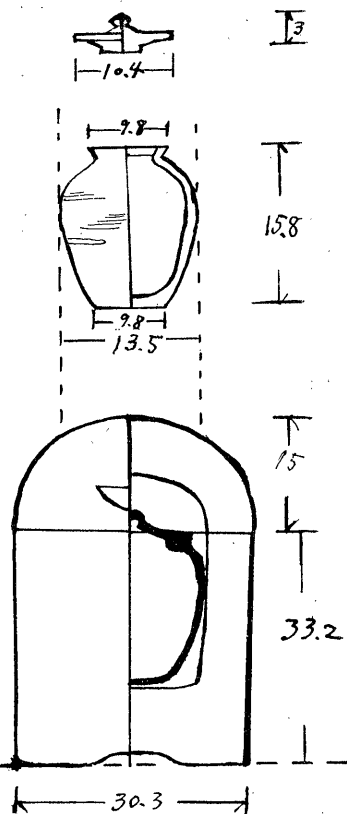
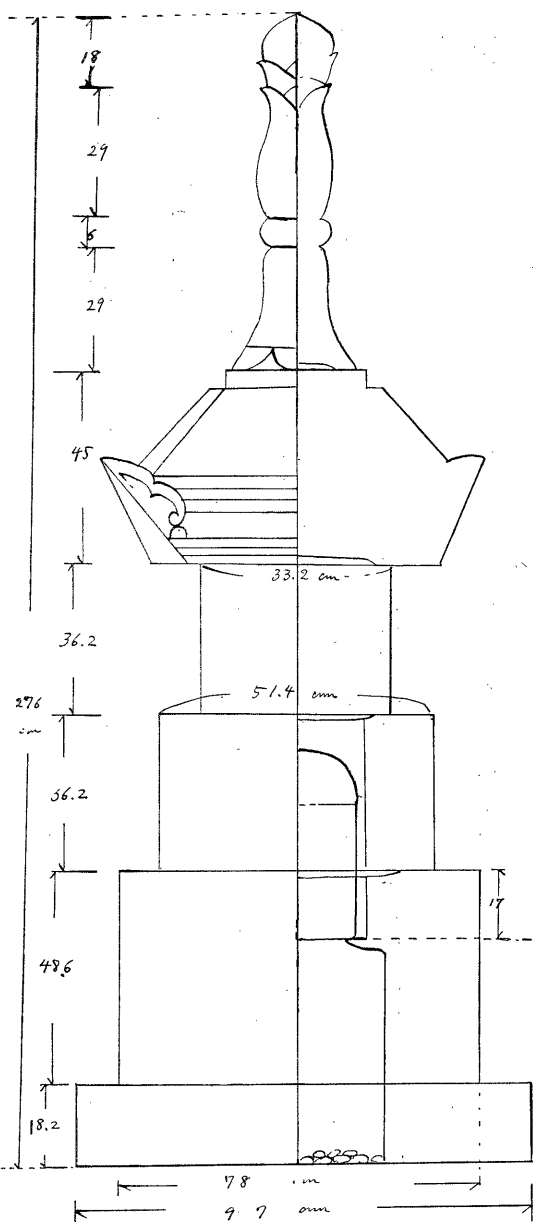
本理院殿照譽圓光徹心大禪定尼

六月八日

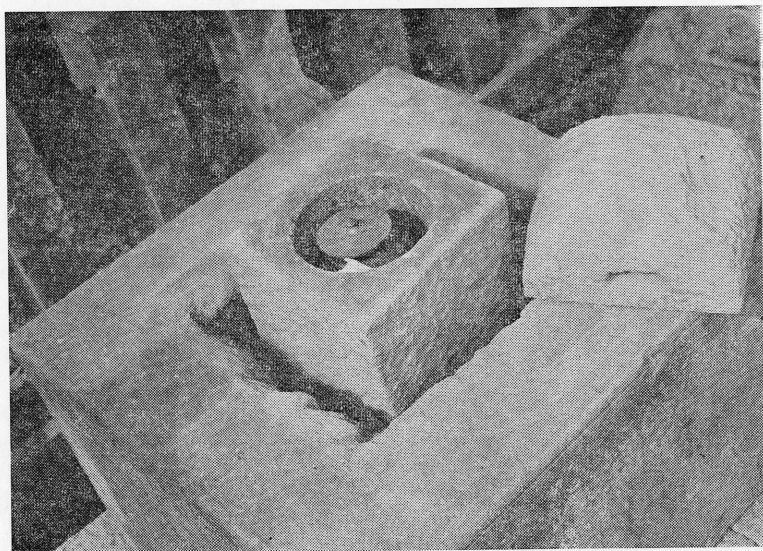
と刻まれてある。

曲げ物は殆んど原型をとどめぬまでに腐朽し、和紙殘缺や青黒い粉末にまじつて焼かれた白齒一本が判別出來た。

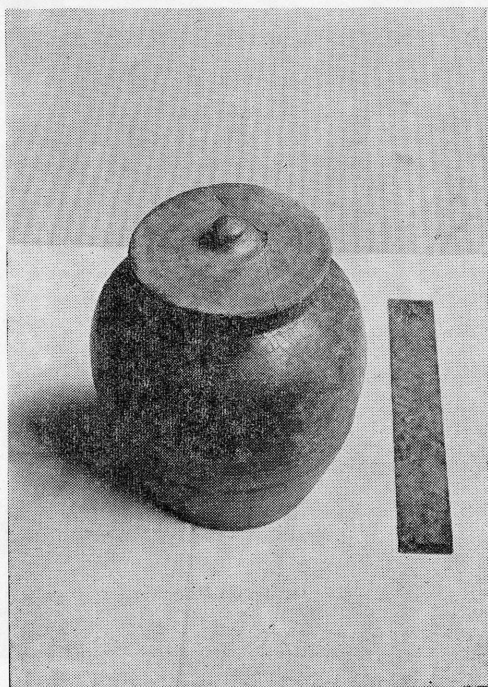
信濃善光寺本理院殿廟墓について



第 二 圖



(上) 地水段内部の状況
(下) 壺及び銅板



それらは寫眞撮影ののち直ちに舊に復し、密閉して洒淨法要を終了したのである。

大本願内の御靈屋をはじめ崇源院殿の菩提のために建立されたにかゝわらず、いつかその所在が不明となつたのに對し、本理院殿は廟墓の地が移動したあととも他の縁者の墓塔の中心としてあつく祀られている。それは全じく鷹司家より出た四代綱吉夫人信子（淨光院）をはじめ、代々の徳川家大奥には京都公家出身者が多く迎えられて居た因縁により、永らく供養が缺かされなかつた結果であらう。

明治以降善光寺と徳川家との關係は自然消滅の狀態になつていたが、大本願では永代供養の傳統を守つて先年もこれら廟墓の修覆を行つたのである。しかし善光寺内外は今や變革の波にさらされている。開發や改善の名のもとにいくつかの建造物の移動が行われ、傳統的な法儀も次々と形をかえ、あるいは失われて行きつゝある現在、せめて後日の證のために今まで知り得たことの一端を發表させて頂く次第である。

註

1、坂井衡平氏「善光寺史・下」九七一頁參照。なお崇源院殿は淺井長政の女お江、寛永三年九月薨去、増上寺及び傳通院に葬す。

2、拙稿「善光寺の江戸開帳について」佛教大學研究紀要第四四・四五合巻號所收。「徳川實紀四三・四四」常憲院殿御實紀」には元祿度の例がある。

3、坂井衡平氏「善光寺史・下」九七一頁。

4、本理院殿の甥鷹司教平の女信子、二ノ丸に居り寶永六年二月九日薨す五二才、寛永寺に葬。

5、「武江年表」文久元年七月一日の條。

6、年越宮の建物は市内城山に移され現在縣社となつている。

信濃善光寺本理院殿廟墓について

- 7、兄に大乘院の信尊大僧正、弟に三寶院の覺定大僧正、妹に秀山瑞藤尼あり、その他一族から諸門跡に住したものが多くある。
- 8、長野縣教育委員會編「信濃善光寺正月行事」一〇五頁。
- 9、一、寛文二年三月廿五日 中之丸本理院御代香 岡本内儀善光寺參詣 御上人様御同道來寺 笈佛等見 一夜逗留 如來脇侍（勢至）建立 戸帳寄進 八世安譽云云。